

地域全体で事業を推進

アフリカ大陸最大の湖・ビクトリア湖の湖畔に位置するニヤンド郡ニヤカチ地区。ここに、JICAの円借款で2008年に完成したソンドウ・ミリウ水力発電所がある。ケニアの主要河川の一つ、ソンドウ川からの流水を利用した発電施設で、日本企業の先進技術が使われている。

電力需要が伸び続ける同国では、発電所の老朽化などにより電力供給が逼迫している。その中で、最大出力60メガワットのソンドウ・ミリウ水力発電所は、国内電力需要の約5%を賄うものであり、ケニアの経済成長に欠かせない電力の安定的な供給に貢献するものだ。

「現地の人々のことや現場での苦労を思い出し、胸がいっぱいになりました」

1997年から2004年まで、発電所の施工監理事務所長として事業を統括してきた日本工営株式会社コンサルタント海外事業本部・迫田至誠さんは、完成の知らせを聞いたときの心境をそう振り返る。04年以降は別の国のプロジェクトを担当したため、完成まで見届けられなかったものの、この事業には深い思い入れがあった。

97年、現地に赴任した迫田さんは、仕事が多く忙しい生活を送る人々

日本工営株式会社コンサルタント海外事業本部
Sakoda Shisei

迫田 至誠さん



施工監理技士や設計担当技師、ケニア電力会社職員など、多くの事業関係者や技術者たちが、迫田さん(前列右)とともに働いてきた

からの「発電所の建設が始まれば就職の機会も増え、生活が良くなる」という強い期待を感じた。だが、作業員として雇えるのは希望者をはるかに下回る2000人が限度。これに一部の住民が不満を訴え、さらに工事現場での環境問題も取りざたされ、事業が滞ることがあった。

それを打開しようと地域住民、事業実施機関のケニア電力公社、ケニア政府、日本政府、JICAは、事業を進める上でのさまざまな問題を協議する場として、住民代表やNGO、地方行政官、有識者、議員らからなる技術委員会を設置。迫田さんもプロジェクトの直接の担当者として同委員会に参加した。そして、同委員会が問題の調査と分析、解決策の提案を行い、それをもとに関係者が一体となり、雇用や環境といったニヤカチ地区全体の問題解決に取り組んだ。その結果、徐々に住民の理解と協力が得られ、事業が円滑に進められるようになった。

「大規模インフラの建設事業だからこそ、地域住民との対話や信頼関係が欠かせません。事業の恩恵が住民にきちんと届き、発電所が彼らと共存できる関係を作らなくては」

ずっと使える技術を残したい

工事中は、ケニア人技術者の専門性を高める勉強会などを開き、常に



図書館で熱心に勉強する子どもたち。地域の集いやセミナーなどの会場となることも

「現地に技術を残す」ことに努めた。「発電所が完成してしまえばこの事業での現地の人々の仕事はなくなる。でも彼らが得た技術や経験は、いつの日か必ず、国の経済発展や社会開発の礎となります」。

迫田さんの指導のもと、若手の測量技師として当初から工事に携わり、設計・施工監理から住民との折衝まで幅広い業務をこなしてきたピーター・ムゴさんは、「測量技師のキャリアを築いていく上で欠かせない多くのことを学んだ」と話す。ムゴさんは今、その経験をもとに首都ナイロビで測量会社を経営するようになった。JICAが実施する調査などでも活躍しているという。

また迫田さんは、工事現場の見学などを開き、地域住民との交流も大切にしてきた。中でも印象的なのが、貧しさを教科書を買えない子どもたちや青年たちの学習の場として、日本工営や、そのほかの事業関



建設現場を見学に来た地元の小学生たち。「現場を見た彼らから『将来エンジニアになりたい』との感想を聞くとてもうれしい」と迫田さん

係企業などによって2001年に建てられた図書館だ。各教科の教科書がそろえられ、今ではすっかり地域になくしてはならない施設となった。発電所の建設事業が終了した現在は、日本工営や日本の市民などの支援を受けながら、地元の婦人会が運営に当たっている。

今でも機会を見つけては、思い入れの深いニヤカチ地区を訪ねるといふ迫田さん。そんな彼を、地元の人々は親しみを込めて「ニヤドゥンドウ」(現地語で「小さい人」の意味)と呼ぶ。「自分たちに比べ、日本人は背が低い」とのイメージがあるためらしい。だが、実際は皆がよく分かっている。小さな彼がもたらしたのには、国の成長をけん引する大きな力であるということ。

さこだ・しせい

1952年鹿児島県出身。熊本大学土木工学科卒業。74年、日本工営株式会社入社。国内事業部を経て、79年より海外事業部へ。以後、ミャンマー、ネパール、インドネシアなどで、主に日本の政府開発援助による水力発電所の計画、調査、設計、施工監理業務に携わる。97年～2004年、ケニアでソンドウ・ミリウ水力発電所の設計施工監理を担当。09年、同事業が「JAPANプロジェクト国際賞」を受賞。現在、コンサルタント海外事業本部副技師長。技術士。

発電所は、ソンドウ川からの取水を、急な斜面に設けられた導水管に流し、その勢いで電力を生み出す仕組み。その先には、ビクトリア湖が広がる



「大きな事業だからこそ、地元の人々との信頼関係を大切にしたい」

水力発電の専門家として、開発途上国で数々の発電所の建設に携わってきた日本工営の迫田至誠さん。地域住民の目線や人々との交流を大切に彼の姿勢が、ケニアの大型インフラ建設プロジェクトの現場でも共感を呼んだ。

第10回

ゲンバの風

